

---

I love you

桜咲 水穂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

I l o v e   y o u

### 【Nコード】

N 6 5 9 6 D

### 【作者名】

桜咲   水穂

### 【あらすじ】

似合わない。そう思いながらも、頭に浮かぶ『バレンタイン』の6文字。…決意をし、チョコレートを買に行った哀は、その途中で誘拐されてしまつて…！？

## バレンタイン。

それは、女性が男性にチョコレートを送る日。

義理チョコ、逆チョコ、友チョコ……それと、本気で愛が籠ったチョコレートなどがある。

…告白をしたり、愛を深めたりするには、丁度いい日だ。

数週間前、目に入っただのは、『バレンタイン』の6文字。  
哀は、溜息を吐いた。

どうしたの、私。私らしくないわ……。

ランドセルを背負ったまま、流石に実際に睨みつけると大変なので、そこ一点を見つめたまま心の中でその文字を睨みつける。

「……………」  
はぁ…………。

無意識の内に出てきた溜息。

本当に、どうしちゃったのかしら、私。

哀はそんなことを思う。

… どうしてしまったのだろうか、自分は。

チョコレートなんて、バレンタインなんて…

クリスマスだって、みんなみんな、自分に似合わない。

そんなことを考えている時、思い浮かぶ1人の少年。

… 自分が作った毒薬のせいで幼児化し、高校生としての生活を奪ってしまった人。

江戸川コナンこと工藤新一。

好きなの？

… No ……。

嫌いなのか？

… No ……。

聞かれれば、両方『No』になるだろう。

… 自分の気持ち分からない。

… 好きなのか、嫌いなのか、普通なのか。

哀は、そのままその場を後にした。

それが、数週間前の出来事。

「哀君、明日はバレンタインじゃのお……………」

哀君は誰かにチョコをあげたりせんのか？

「私が誰かにチョコレートをあげと思うの？」

しかも、バレンタインに。

阿笠の問いに、哀は冷たく言い放つ。

視線は女性雑誌に向いていて、暫くの間はその瞳に姿すら映してくれなそうだ。

そんな哀の様子に、阿笠は苦笑する。

何となく、哀の答えが予想出来たのだ。

「じゃがお……………」

「例え博士でも、あげないから」

「……………」

「ただでさえ、脂とか油とか…肉とかを禁止されている人にチョコレートなんかをあげるわけないでしょう？」

そう静かに言う哀に。

阿笠は心の中で涙を流したのであった。

どうやら、バレンタインの話題を出したのは、もしかしたらチョコレートを食べることを許可してもらえないかもしれないと思ったかららしい。

それと、哀のチョコレートを買えるかも…というもう一つの思いもあったらしい。

だから、どうしちゃったのよ、私。

雑誌を捲ると、『バレンタイン特別企画』好きな人のハートをゲットしよう！』という大きな文字が嫌でも瞳に入ってくる。その下には、チョコレートの作り方が書いてある。

別に、そんなものに興味があるわけではない…が。

素直になってしまいなさい。

そんな命令が、頭の中に響いて。

哀は、眉間を顰めた。

勝手に瞳が脳がその続きを求めてくる。

…仕方なく、雑誌に顔を落とすのだった。

…彼を好きという気持ちは確かだ。

彼には、彼女がいる。

そう思い、この思いを押し殺しているけれど。

やっぱり、好きなものは好きなのだ、愛しているのだ。

似合わない。

彼は、珍しいことがあるなどしか、思ってくれないかもしれない。

……こんなにも、好きなのに。

全ての原因は、素直になれない自分にある。

哀は、決意したように雑誌を握り締め、ソファから立ち上がった。

逃げるなよ灰原…自分の運命から…逃げるんじゃないぞ…

…逃げてなんか…逃げて、なんか…いない…わよ…。

…哀は、そのまま外へと駆け出した。

「はあっ、はあっ、はあっ……………」

近くのコンビニまで走って行った。

全力で走ったせいで、息苦しい。

だが、それすら我慢してコンビニ内に入る。

中は暖房が効いていて、寒い外とは大違いだ。

そしてそのままチョコレート売り場まで行き……………赤い包装と白いリボンで包んである可愛いチョコレートを手に取った。

「……………」

そして、そのままレジまで行き、商品を差し出す。

「250円です」

バックから財布を取り出し、その中から更に250円を取り出す。

…丁度、ピッタリあった。

袋に入れられたチョコレート片手に、帰路に着く。

そこには誰もおらず、無人だった。

…いや、そう見えるだけだ。

哀ともう1人　いかにも怪しい黒服の男と車。

…哀が気付かないのは、緊張しているからだろっか。  
足音を立てずに…男は哀に近づく。



誘拐、だ。

「……………つく……………」

ちよつと離し……っ！

「さあて。一緒に来てもらおうか？お嬢ちゃんよお」

男の腕には、ぐったりと気を失った哀の姿。

だが、その手にはチョコレートが握られたままだった……………

…。

「　　はあ……？灰原がいなくなつたあ？」

どっかに出掛けたんじゃないの？

『そ、そうじゃなくてじゃな……！電話があつたんじゃない……………！』

「電話あ？なんの？」

『　　身代金要求の電話じゃよ……………！』

その言葉にコナンは全身に鳥肌が立っていくのが分かった。

「誘拐、か……………！！」

ピチャン ピチャン

…そんな水音に、哀は覚醒した。

「ん……………」

ゆつくりと目を開き、辺りを見回す。

そこは、どこかの倉庫のようだった。

ダンボールが積み重ねられ、ロープがそこら辺に転がっている。  
…もう、使っていない倉庫なのだろうか。

ここは……………

「…お目覚めか？お嬢ちゃん」

「え…！？」

だ、誰なの！？あなた達！！

「ほう……………？大人っぽいんだな…」

それに、ガキにしちゃあ、綺麗な顔してやがる……………。  
海外に売りや、大層な金になるな…。

「！！…どうということ？」

哀は男達を睨みつける。

1人のリーダーらしき人物が、口を開いた。

「お前の保護者に、連絡をした」

身代金、5000万円を用意しろとな……………。

「な、なんですって！？」

「携帯、拝見させてもらったぜ」

こんぐれーのガキが携帯とは…洒落てるもんだなあ。

ますます気に入ったぜ。

クツクツ…クツクツクツ…

男の不気味な笑い声が、もう随分の間使われていないであろう倉庫に木霊する。

それが気持ち悪くて、哀は吐き気を覚えた。

「し、新一……………」

「博士！灰原は！？」

「…まだ、何も分かつとらん」

「……………そうか」

その言葉に、コナンは顔を顰める。

「警察にも通報しとらん…」

「…連絡は、何かあったか？」

「いや…身代金要求の連絡以外はまだ何も」

P r r r r r …… p r r r r r ……

…電話がきたことを、知らせる音。

緊張した空気が漂い、コナンは唇を噛み締め取った。

受話器を、手に

「……………もしもし」

『よお…5000万は用意出来たか？』

「……………出来た」

お、おい……………!?

阿笠が何かを言いたそうだったが、あえてそれは無視した。

『じゃあ、今から言う場所に金を持って来い。…警察に通報はするなよ?』

「……………」

ガチャ

ツーツーツー……

後には、機械音と沈黙が残った。

「……博士、新聞紙は……?」

「……?それなら、ここにあるが……?」

「……………切るぞ」

「お、おい?新一?」

突然の言葉に、どこか抜け落ちている説明に意味が分からず、博士はコナンの名を呼んだ。

「……5000万、だったよな?」

「あ、ああ……」

「だったら、上の方に本物を、下の方に新聞紙を敷き詰めときゃいいんだよ」

「そ、そうか…！」

そうしたら、本物を用意しなくても済むし、盗られる心配もない！

…コケン

無言でコナンは頷き、阿笠は新聞を切り始めたのだった。

「……持ってきたよ」

倉庫内に響いたのは、ボーイソプラノの子供の声。それに不審に思った仲間の1人が影から出て来る。

「こ、ども…？」

大きな黒い鞆を持ち、そこに立っているのは1人の小学生くらいの男の子。

「身代金、欲しいんでしょ？ホラ、持ってきたよ」

「お、おう…」

流石に、子供が持つてくるとは予想出来てなかった誘拐犯は、呆氣とられた。

笑顔でこちらに鞆を差し出してくる少年。

戸惑いながらも、それを受け取った。

「ねえ、哀ちゃんは？」

え…？

『哀ちゃん』……………？

「哀？…ああ、あのガキの名前か」

そう言つて、他の男とともにロープで繋がれ連れてこられた哀の姿。

「江戸川君！！」

「うるせえ！黙つてろ！！」

「…っ」

1人の男が、哀の口を塞ぐ。

暫く抵抗を続ける哀だったが、それもすぐに収まった。

「ね、哀ちゃんを返してよ…」

『哀ちゃん』

そう呼ばれるたびに、心臓が高鳴る。

「フン…信じてたのか？」

男の言葉に…変わる、気配、雰囲気、空気。

ゾクリと、男は背に悪気が走るのが分かった。

「信じてるわけ、ねえだろ？」

「…っ！んなつ……………！！」

「なあ、知ってるか？」

サッカーボールつて、当たると結構痛いんだよなあ……………。

「だ、だからなんだ！！！！」

キュイ、とコナンは唇を引き上げ、不敵な笑みを浮かべた。

そのまま、キック力増強シューズに手をかけ…最大にする。

そして、どこでもボール射出ベルトに手をかけ、ボールを出し…。

自分の力も最大にし、蹴り飛ばした。

「…！っぐあ……………っ！！！！」

ドサリ、という音をたて、男は倒れた。

そしてそのまま2人目の男に麻酔銃を打ち込み…誘拐犯2人組は全滅した。

「…大丈夫か！灰原！！」

「え、ええ…何とか…」

哀は手元を気にしていた。

…その手には、未だにチョコレートが握られている。

「ん？何だ、それ…」

「え…こ、これ…は…」

ど、どうしよう…

「えっと…」

哀は暫く、珍しく慌てていた　　が。

ついに、決意したようにコナンに差し出した。

「あ、あなたに、あげるわ…」

「え？も、もしかしてチョコか…？」

中身を確認し、コナンは戸惑いながら哀を見つめる。

「そうよ！悪い？」

ブンブンと音をたてる程、コナンは首を振った。

「……………サンキュ」

「……………どういたしまして、名探偵さん」

それから数十分後、誘拐犯は警察に取り押さえられた。

今はまだ、この気持ちを伝えられないけれど

いつか、伝えたいと思う

自分の気持ちに素直になれる日は、一生来ないかもしれないけど

…私、灰原哀      宮野志保は、江戸川コナンこと工藤新一を愛しています



（後書き）

今日はバレンタインですね。

因みに私、渡す人、いません（笑）

お願い事

だーれーかー！

私のような者を支持して下さる心優しき方！

何か小説でリクエストがあつたらどーぞ。

（…嘘なのかな。本当なのかな。期待しないで待っていて下さいね  
v）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6596d/>

---

I love you

2010年10月9日01時13分発行